礼拝説教（2024 年３月 24 日）

説教者：中村信哉

語ったことばを信じて

ヨハネの福音書４章 43-54 節

はじめに

イエス様は、ユダヤからガリラヤへ旅をしておられました。旅の途中、サマリアの井戸で一人の女性と出会います。彼女は、過去に五人の男性と結婚と離婚を繰り返し、その後も別の男性と同棲している女性でした。イエス様が彼女に話しかけ、対話が進む中で、彼女はイエス様こそ「メシア」「キリスト」であると信じるようになりました。また彼女の「証し」を通して、多くのサマリア人がイエス様を信じるようになりました。その後、イエス様は二日間、サマリアに滞在されましたが、その結果、さらに多くのサマリア人が、イエス様を信じるようになったのです。

その後、イエス様は旅を続けて、ついに**「自分の故郷」**であるガリラヤに帰って来られたのです。

1. ガリラヤの人たちの歓迎

イエス様がガリラヤに帰って来られると、ガリラヤの人たちはイエス様を歓迎します。45 節を見ると、**「それは、イエスが祭りの間にエルサレムで行ったことを、すべて見ていたからであった。彼らもその祭りに行っていたのである」**とあります。ガリラヤの人たちは、エルサレムで行われていた過越しの祭りに参加していて、そこでイエス様が行なった奇跡を見ていたのです。病人を癒したり、悪霊を追い出したりする奇跡でしょう。そこでガリラヤの人たちは、ガリラヤでもイエス様の奇跡を見られると期待して、イエス様を歓迎したのです。

しかし 44 節を見ると、**「イエスご自身、『預言者は自分の故郷では尊ばれない』と証言なさっていた」**とあります。ガリラヤの人たちは、イエス様を歓迎していましたが、イエス様ご自身は、ガリラヤでは尊ばれていないと感じていたのです。なぜでしょうか。それは、ガリラヤの人たちが、イエス様の奇跡を見て信じる人たちであったからです。44 節でもイエス様は、**「あなたがたは、しるしと不思議を見ないかぎり、決して信じません」**と言われました。イエス様は、ご自身の奇跡を見て信じる人たちに、決して自分をお任せにならなかったと、２：24 に書かれていました。イエス様は、ご自身の奇跡を見て信じる人たちを信頼されなかったのです。ガリラヤの人たちは、イエス様の奇跡を見たいだけで、イエス様を本当の意味で尊んでいなかったのです。その意味でイエス様は、ガリラヤでは尊ばれていないと感じていたのです。

では、イエス様はどんな人たちのことを信頼されるのでしょうか。イエス様を本当の意味で尊ぶとは、どういうことでしょうか。それは、サマリア人のような人たちです。４：

41 には、**「さらに多くの人々が、イエスのことばによって信じた」**とあります。サマリアの女をはじめ、サマリア人たちは、イエス様の奇跡を見て信じたのではなく、イエス様の「ことばを聞いて」信じたのです。イエス様は、サマリアで一つも奇跡を行いませんでした。しかし多くのサマリア人がイエス様を信じたのです。イエス様のことばを聞いて、イエス様と対話をする中で、イエス様を信じていったのです。イエス様は、ご自身の奇跡を見て信じる人ではなく、「ことばを聞いて」信じる人を信頼されるのです。その証拠に、イエス様は二日間も、サマリアに滞在されました。イエス様を本当の意味で尊ぶというのは、イエス様のことばを信じるということではないでしょうか。イエス様は私たちに、ご自身のことばを信じてほしいと願っておられるのだと思います。

2. カペナウムの王室の役人

イエス様は、以前、水をぶどう酒に変える奇跡を行ったガリラヤの**「カナ」**という町にやって来ました。するとそこに、**「王室の役人」**がいて、息子の病気を癒してほしいとイエス様に願ったのです。当時のガリラヤの王は、ヘロデ・アンテパスという人でした。そのヘロデに仕える役人です。51 節を見ると、彼には**「しもべたち」**がいたようですから、比較的身分の高い人であったようです。彼の息子が具体的にどんな病気であったのかは分かりませんが、52 節を見ると、高熱が出ていたようです。しかも 47 節には、その息子は**「死にかかっていた」**とあります。

彼は、**「カペナウム」**という町から、わざわざ「カナ」までやって来ました。カペナウムからカナまでは、30～40km 離れていると言われます。徒歩で行けば、大体 8 時間ぐらいはかかるでしょう。彼は、この距離を歩いて来て、イエス様に「下って来て息子を癒してください」と願ったのです。「下って来て」ありますから、カナまでやって来る時は、上り坂を「上って来た」のでしょう。相当な労力です。ここに彼の必死さが表れています。

彼は、イエス様にカペナウムまで来てほしいと願うのです。つまり 30～40km の距離を約 8 時間かけて、一緒に来てほしいと願うのです。これは、相当厚かましいお願いです。しかし彼は、そう願わざるを得なかったのです。なぜなら自分の息子が癒されるためには、イエス様が息子に手を置いてくださらなければならないと考えたからです。

また彼は、49 節で、**「主よ。どうか子どもが死なないうちに、下って来てください」**と言っています。彼は、息子が死んだらイエス様にもどうすることもできないから、早く来てくださいと願っています。つまり彼は、イエス様は、病気は癒せるが、死者はよみがえらせることはできないと考えていたのです。この時点での彼の信仰は、イエス様は病人に手を置かなければ癒せない、死者はよみがえらせることはできないというものでした。

3. イエスが語ったことばを信じて

ではイエス様は、彼と一緒にカペナウムに行かれるのでしょうか。イエス様は 50 節で、彼にこう言われます。**「行きなさい。あなたの息子は治ります」**。イエス様は、彼と一緒に

カペナウムに行こうとはされません。ただ「あなたの息子は治ります」という約束の「ことば」だけを与えられました。そしてイエス様は、「行きなさい」と言われるのです。この「行きなさい」という言葉は、「歩きなさい」「生活しなさい」という意味の言葉です。イエス様は彼に、「わたしの約束のことばだけを握って、歩き出しなさい」と言われるのです。この王室の役人を含めたガリラヤの人たちは、「しるしと不思議を見ないかぎり、決して信じない」人たちでした。彼らは、見て信じる人たちでした。しかしイエス様は彼に、見ないで信じることを求められたのです。見て信じるのではなく、ことばを聞いて信じることを求められたのです。

ヨハネの福音書は、見ないで信じる、あるいはことばを信じるということを強調しているように思います。イエス様は、見て信じるユダヤ人たちを信頼されませんでした。むしろことばを信じるサマリア人たちを信頼されました。ヨハネの福音書の最初の１：１には、**「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった」**とあります。また１：14 には、**「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた」**とあります。ヨハネの福音書は、イエス様を「ことば」と表現しています。イエス様を信じるとは、イエス様の「奇跡」ではなく、「ことば」を信じることなのです。またヨハネの福音書の最後のほう、20：29 でイエス様は弟子のトマスにこう言われます。**「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ないで信じる人たちは幸いです」**。イエス様は、見て信じる人ではなく、見ないで信じる人、ことばを信じる人は幸いだと言われます。

王室の役人は、見ないで信じること、ことばを信じることが求められました。そこで彼は、50 節にあるように、イエス様が**「語ったことばを信じて」**、カペナウムに**「帰って行った」**のです。彼はこれまで、見て信じる人でした。ですから、イエス様にカペナウムまで来てもらおうとしていたのです。しかし彼はこの時から、見て信じる人から、聞いて信じる人、ことばを信じる人に変えられたのです。彼はこの後、30～40km の距離を約８時間かけて、歩いて行かなければなりません。その隣にイエス様はいません。あるのは、「あなたの息子は治ります」というイエス様の「ことば」だけです。この「ことば」だけを頼りに、約８時間の道のりを歩き続けたのです。迷いや不安もあったでしょう。疑う心と葛藤しながら歩き続けたでしょう。しかし彼は、決してイエス様のもとに引き返さずに、前を向いて歩き続けたのです。それは、見て信じる生き方から、ことばを信じて生きる生き方への決定的な転換でした。

4. <u>家の者たちもみな信じた</u>

すると、道の途中、彼のしもべたちが迎えに来て、彼の息子が治ったことを告げたのです。彼は、なぜ息子が治ったのかを確かめるために、息子が治った時刻を尋ねました。すると、ちょうどイエス様が「あなたの息子は治る」と言われた時刻だったのです。その時、彼は確信しました。息子は自然に治ったのではない、イエス様のことばによって治ったのだと。イエス様は、息子に手を置かなくても治せる方である、ことばだけで治せる方

であることを知ったのです。それは、つまりイエス様こそ「まことの神」であることを知ったということです。

ユダヤ人たちは知っていたでしょう。「まことの神」は、ことばだけで世界を造られた方であることを。神様が「光、あれ」と言われれば、光が造られたことを知っています。イエス様が「あなたの息子は治る」と言った時に、息子が治ったということは、イエス様こそ「まことの神」であることの何よりの**「しるし」**であったのです。

そして、このことを通して、53 節にあるように、**「彼自身も家の者たちもみな信じた」**のです。彼の家族もイエス様を信じるようになったのです。この中には、癒やされた息子も含まれるでしょう。彼の家族の救いは、彼がイエス様の「ことば」を信じることから始まったのです。

おわりに

私たちの人生は、王室の役人のように多くの問題を抱えます。自分自身の病気や家族の病気など、予期せず事態に見舞われます。その時に私たちは、見て信じるのか、それとも見ないで信じるのか、あるいはことばを信じるのかが問われているのだと思います。私たちは問題を抱えると祈ります。そこで私たちが求めることは、見て信じることです。すぐに神様が祈りに応えてくださることです。ある人たちは、見て信じることに固執します。神様が祈りに応えてくだされば信じる、祈りに応えてくださらなければ信じない、これは、「しるしと不思議を見ないかぎり、決して信じない」というガリラヤの人たちと同じではないかと思います。願う、見る、信じるという順序が、ガリラヤの人たちの順序です。しかしイエス様は、願う、信じる、見るという順序を求められるのです。「見る」と「信じる」の順序が大切なのです。見てから信じるのか、それとも信じてから見るのか。

私たちは問題を抱えた時、神様に祈るようにと言われます。しかし祈りは、すぐに答えられない時があります。その期間は、「ことばを信じる」期間なのではないでしょうか。王室の役人がカペナウムに向かう約８時間の道のりを、イエス様の「ことば」だけを頼りに歩き続けたように、私たちもその期間、イエス様の「ことば」だけを頼りに生活し続けていくのではないでしょうか。

大切なのは、イエス様から「ことば」を与えられるということです。この王室の役人と同じカペナウムに、一人の百人隊長がいました。彼のしもべが病気で苦しんでいたのです。その時、彼はイエス様にこう願いました。**「ただ、おことばを下さい。そうすれば私のしもべは癒されます」（マタイ 8:8）**。この百人隊長は、イエス様の「ことば」だけ与えられれば、しもべはいやされると信じたのです。彼は、見ないで信じる、あるいはことばを信じる人でした。イエス様は彼を見て、**「わたしはイスラエルのうちのだれにも、これほどの信仰を見たことがありません」**と言われました（マタイ８：10）。私たちは、自分の願いだけでなく、「ただ、おことばを下さい」と祈ることが大切なのではないでしょうか。自分の願いに対する神様のみことばの約束を求めることが大切なのではないでしょう。そして、約束の「みこ

とば」を頼りに、祈りが応えられるまで日々の生活を続けることが大切なのではないでしょうか。イエス様の「ことば」を信じる私たちの信仰が、自分自身と家族を救うことになるのです。使徒パウロは、こう言いました。**「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒 16:31）**。イエス様を信じるとは、イエス様の「奇跡」を信じることではなく、イエス様の「ことば」を信じることです。イエス様の「ことば」を信じていく時、自分も家族も救われるのです。

私たちは、イエス様を本当の意味で尊んでいるでしょうか。それとも歓迎しているだけでしょうか。イエス様は「預言者は自分の故郷では尊ばれない」と言われました。教会は、キリストのからだであり、神の家族です。その意味で、教会はイエス様の「故郷」と言えるかもしれません。教会は、イエス様を歓迎する所ではありません。しるしや不思議を求める所ではありません。そうではなく、イエス様の「ことば」を求める所です。イエス様のことばを求め、イエス様のことばを信じることこそ、イエス様を本当の意味で尊ぶということなのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは、王室の役人のように自分自身や家族の問題を抱えます。長い祈りの中にある者もいます。どうか私たちに「ただ、おことばを下さい」。約束の御言葉を与えてください。そうして、カペナウムへと続く長い道のりを歩き続ける力と希望を与えてください。私たちがただあなたを歓迎するだけでなく、本当の意味であなたを尊ぶ教会となりますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。